



女性活躍・ダイバーシティを進めるために 地域と大学が共にできること

岩手経済同友会代表幹事
(岩手朝日テレビ株式会社代表取締役社長)

農学部応用生物化学科教授

畠山 大 × 山田美和

司会：海妻径子副学長・ダイバーシティ推進室長

大学にとって、大切な地域のステークホルダーである企業。その企業の集まりである岩手経済同友会の畠山大代表幹事をお迎えし、地域の特産品・海藻のバイオプラスチック原料化を研究して、このたび女性上位職登用制度を利用しての教授昇進を果たされた、本学農学部の山田美和教授とともに、女性活躍・ダイバーシティを、大学と地域がどのように力を合わせ進めていけるのか、お考えをお聞きしました。

ジェンダーと世代の多様性

畠山：農学部だと、男女の比率はどれぐらいですか？

山田：女性教員は学部全体で2割ぐらいで、獣医学科が多いです。私の所属する応用生物化学科は私ひとりだけです。分野によって違うと思います。

海妻：農学部は女性教授が1人しかいなかったところに、文部科学省補助事業の補助金を活用して女性上位職登用制度をもうけたことで、このたび山田先生を含む2人の女性教授が誕生し、あわせて3人になりました。最も女性の多い人文社会科学部でも、女性教員は

ようやく3割に達したところで、女性教授もわずか7人なので、岩手大学では今後も補助金を活用しての女性上位職登用を、補助事業期間終了後はすずらん基金も活用しながら続けていき、女性教授を増やしていかなければいけない状況です。

同様に地域でも、女性を含め多様な人材を増やしていかなければなりません。特に岩手では、人口流出や経済の縮小などの課題があり、震災からの復興にも課題が残る中で、地域に多様性を生み出していくコストをかけられないという声もあれば、こういう地域だからこそ多様性のある人材を活用すべきとの声もあります。畠山幹事に、岩手における多様性ある人材活用の現状に対するご認識と、より推進する必要があるとすれば、そこにどういう意義があるのか、お考えをお話いただければと思います。

畠山：私は岩手から東京の大学に出て卒業後メディアの会社に入りましたが、そこは報道記者とか制作の現場など裏方さん含めて、女性の上司や同僚が普通に多い会社でした。その後岩手に帰ってきましたが、今、弊社の3人いる局長のうち、1名は女性です。岩手経済同友会の会員でも、東京に本社のある大企業

の、岩手のトップの支店長さんとか支社長さんは、かなりの数、女性の方が務めていらっしゃる。その点では盛岡にいても、世の中の女性登用の大きい流れを感じます。

ただ、岩手の地元企業の経営者の皆さんに聞くと、女性に管理職登用を打診しても本人がイエスと言わないケースが多く、国が決めたロードマップに沿うのは難しい、という話をされる方も多いです。男女だけではなく、経験を積んで例えば50歳にならないと管理職にできないというような、ジェネレーションでくる枠組みも存在します。しかし、東京の誰でも知っているとする大企業の社長は40代、副社長は30代の女性だとお聞きしました。経営陣が判断すれば、年齢や性別ではなく一人一人の能力によって登用し、幹部職員を作れると思います。逆に、年齢によるくくりと男女半々に登用することを同時に数合わせ的におこなってしまうと、登用された女性に対して同じ世代の男性が、「僕のほうが能力高いのに、数字合わせの影響で偉くなれなかった」というような不満をもち、組織の活性化がマイナスに進むときがあったりします。若手でも60歳でも同じポストに就けるようにすれば、男女で、

同じような世代で比べて「自分の方が上なのに」という不満が生じにくいのかなと思います。

海妻: 大学でも、教授になるのは年齢に関係なく、業績で柔軟にと言われていますが、必ずしも現実はそうなっていません。また、教授になってからは執行部役員など大学運営の仕事も引き受けなければならず、研究に時間を取れず大変になるので、登用を必ずしも喜べないとの声も聞きます。山田先生は、最近の大学の「女性登用」の方向性をどう思われていますか。

山田: やはり、やる気とどれだけ能力があるかで、評価していただくのがありがたい。私は、年齢的に普通にいけば、今すぐには教授になれなかったと思いますが、研究業績はきちんとあげてきた自信はあるので、今回、女性上位職登用制度を使って、教授にさせていただいたのは、非常にありがたいチャンスでした。



山田美和 / 農学部応用生物化学科教授

海妻: 岩手大学の女性研究者支援は、昇進に必要な研究業績を積むための研究支援もしております。「女性だから抜擢された」という声に対して、山田先生のように、力強く「十分な研究業績を積んでいる自信がある」と言えるようにするための支援を、すずらん基金も活用して、今後もやっていきたいと思えます。

地域のために大学ができること

海妻: 山田先生は三陸の海藻のバイオプラスチック原料としての活用を研究されていて、地域の方々と共にプロジェクトを進めておられますが、地域の方々の女性研究者や女性活躍に対する意識について、お感じになっていることはありますか？

山田: 釜石や山田湾の漁協の方と一緒に船に乗って、微生物のサンプルの採取などをやらせていただいておりますが、すごく応援して下さるのでとてもありがたいです。女性だからというよりも、若い人が喜ばれるというのがあります。漁業関係者の方々はお年寄りの方が多く、学生も連れていくと喜んで下さる。皆さん後継者が欲しいとおっしゃいますが、若い人がどんどん地方から出て行ってしまっている現状が、

フィールドワークに出るとひしひしと感じます。今、我々ができることは、学生を連れて行って地域の方々と交流させていただくことかと。他にも、英語の論文の謝辞に、お世話になった地域の方のお名前を書いていて、その論文を送ると、「俺たちがそんな研究に結びついているの」とか「英語でよく分からないけど楽しい」と言ってくれるので、そういったことで、少し元気になってくださったと思います。私の研究は大手企業と一緒にやっているのですが、地球環境の保全に貢献するだけでなく、最終的には地域の新しい雇用にもつなげていけたらと思っています。

海妻: 畠山幹事からも、地域の経済界のために、女性登用のあり方も含めて大学が変わってほしいところや、地域と大学との関りで期待されることはありますか。

畠山: 今日、大学のキャンパスに足をふみ入れてみて、これだけ若い人がいてエネルギーに満ちているのは、改めてものすごいことだと思いました。我々民放の場合、スポンサーの多くは視聴率では20~30代の女性を重要視しているケースがほとんどですが、そのターゲットがまさにここにいて積極的に活動しているというのは羨ましい限りです。

沿岸部で、「東京の大学の研究室から人が来る」となると、漁協が「この人なら研究者と話ができる」と考えて、特定の人だけが、対応をすることになりがちだったりします。そうではなくて、階層や役職を限定せずに、リアルに働いてらっしゃる様々な方と大学の研究者が交流するというのが、ものすごい力を生むのではないかと思います。弊社でも、役員会をしたらそこに20代も60代もいる、みたいなことができたらいいなと思っています。通常の企業の昇進は、キャリアを積んだらこの試験受けて、というようにある程度の段階を踏むため時間がかかりますよね。それを超えるのは簡単ではないと思うけれど、日常の中で地域とか年齢を超えて交流できる、一瞬ではなくて、つながり続けられる仕組みが、とても大事だと思います。

「半分地元民・半分よそ者」の視点から

海妻: さきほど畠山幹事が岩手出身で東京で就職し、岩手に戻られたというお話がありましたが、実は私も岩手出身で進学で東京に行き、縁あって岩手に戻ってきました。畠山幹事や私のような、半分地元民半分よそ者というか、地元以外も知っている人間だからこそ、見えてくるものがあるのではと思っていますのですが。山田先生はどちらのご出身ですか？

山田: 埼玉です。岩手は11、12年目ぐらいですね。

畠山: 岩手に帰ってきたのが5、6年前ですかね。僕は中・高校は盛岡で過ごしましたが、祖父と父は田野畑村にいて、父は漁業協同組合長でしたので、山田先生の研究にとっても興味を持ちました。



畠山大 / 岩手経済同友会代表幹事

山田: ありがとうございます。今は、漁獲されない海に残された海藻を使っていますが、国内でCO₂を減らすために作られる藻場や小湊にできる海藻、国内外で問題になっている異常繁殖していて使われない海藻などを全部使って、プラスチックにさせたいというのが構想です。最近では地元のテレビ局も取材に来て下さって。早く実用化レベルまで研究を進めようと頑張っています。

海妻: 三陸の海藻を使う発想はいつ頃から？

山田: 岩手大学に赴任した後、准教授に昇進したときに、教授の研究を手伝うのではなく、自分自身のテーマで研究できることになりました。そのときに、昔から海が好きだったことと、バイオプラスチックの微生物汚染の研究は、学生時代からずっとライフワークとしてやっていたので、せっかく海のある岩手に来たからというので、海とバイオプラスチックを組み合わせたテーマで研究を始めることにしました。

海妻: 「せっかく岩手に来たから」という、外から来た方ならではの着眼ですね。海産物がもつ可能性を、もっと早く地元が気づいてもよさそうですけど、存在が当たり前になっていると逆に気づかない。畠山幹事も東京でいろいろ経験されて、帰った後では地元を見る目は変わられましたか？

畠山: もともと、岩手県出身ということ誇りにやってきましたので、本当にいいところだなという思いは変わりません。ただ、そこに県民が色々な面で気づいていない。たとえば、昔は三陸のわかめを「鳴門わかめ」として出荷したし、松茸も東京の人たちは岩手が生産量全国一、二つというのを知らない。岩手の名前がついているナショナルブランドの産品が少ないです

よね。それをずっとジレンマとして感じています。ブランド発信力がないのが少し残念です。

海妻：県民は、自慢するのをよしとしないところがありますよね。岩手の女性は全国統計を見ると就労率も高いし、管理職比率も決して低くない。女性の非正規雇用率の高い東京よりも、岩手の女性のほうが活躍している面があるのですが、そういう女性が表に出てこない。だから岩手の大企業の女性支店長や地場産業の女性社長の方々に、もっと表に出てロールモデルになっていただき、「実は女性が活躍している」というのを岩手のブランドにしていきたいです。

女性活躍は進んでいるか

畠山：数年前、東京のとある大企業で、女性のほうが圧倒的に就職試験を通過していくので、男女半々にしようとするとう無理がでてしまい7割女性でよいということにしたらその企業はそれですごくいい形になったと聞きました。私が東京で勤めた会社でも、「男女がどう」というのが話題に出ることはほとんどない感じで、本当に自然なんですよね。一方で弊社は、さきほど述べたように女性が局長ですが、なかなか次がない。同じくらいの女性リーダーが複数出てくると、性別に関する話題が出なくなるのかなと。ひとりで背負うのは大変かなと思います。世代や性別ごとに、それぞれが点で一息懸命頑張っている感じがすごくもったいないなと。孤立している点をつなげ増やす場を、経済同友会や自治体が作れたらいいのではと思います。

海妻：岩手大学でも、これまで「女性初の」学部長や理事が生まれたことはあったのですが、その方の退任後になかなか続く女性がない。そうするとノウハウも継承されず、女性リーダーの孤立も解消されません。山田先生は学科で女性教員ひとりの状態で、しんどいことはありますか？

山田：私は学部4年生までは農学部所属で、そのあとはずっと工学部です。研究室にいる人の9割方が男性でしたし、岩手大学に来る前の職場でも、私以外、研究員全員男性でした。ですからちょっと慣れすぎていて(笑)、何も思ったことがないのと、皆さんが対等に扱

てくださっていて。私より一回り上の世代の女性研究者の方々は、本当に大変だったらしいです。男性が対等に研究者として扱ってくれない苦しみがあったようですが、私の世代ではそういうふうに見られたことはないのかなと。私の研究室の学生は男女半々ですが、何も差がなくやっているのを見ると、先人の方々の「こういう風にした方がいいよ」というメッセージがどんどん浸透していると感じますね。私の甥姪を見ていても、姪がブルーが好きで甥が赤が好きだったりとか、親の教育も違ってきているのかなと思います。少しずつ変わっている気がしますね。ジェンダーレスの社会になっていくのではないかと期待しています。

畠山：もうちょっとしたら女性のほうが主導権を持ってやっていく会社がたくさん出てくると思うんですよ。たぶん今、過渡期なのかなと。逆に、山田先生がおっしゃった「男性の中に一人というのが楽」というのもよくわかります。女性がグループの中に複数いるよりも、ひとりの方がうまく回っていたといったことが、部署によっては起きています。変化の過程でそういうこともあるのかなと。

海妻：おそらく女性ひとは、他の女性からの助けが得られないかわりに、女性同士で比較されることもない点は楽だと思います。それから女性が7～8人とかある程度増えると、気の合う女性同士で助け合えるし、「女性にもいろいろな人がいる」ことが当たり前になるので、楽になる。その間の、中途半端な少なさのときが、気が合わなくても何かと女性同士ということで一緒にされがちで、一番しんどいのかもかもしれません。

畠山：女性が「頑張っている」ということから、「頑張っている」が早く「普通」のことになると思います。僕らメディアは、ダイバーシティとかジェンダーとか新しい言葉が出てきたときに、誰よりも早くそれらを正しく理解して視聴者の皆さんに発信するのが仕事ですが、社会で暮らしている人全員が、例えばダイバーシティとは何かということを本当に分かってもらえるまで、根気強く伝え続けるのが大切だと思っています。本当にダイバーシティの

状態になったら、わざわざ言わなくてもよくなる。そうすると女性の登用はもっと進んでいくと思うんですよ。SDGsも、必死になってそれについての番組をやったので、そろそろ皆さんもSDGsが「持続可能」に関することである、くらいのことは何となく伝わってきたかなと。我々メディアはある言葉を浸透させる一端を担う重い責任を感じると同時に、とても難しい仕事だと思っています。いかに新しい言葉を正しく県民の皆さんに分かってもらえるかが、僕らの最近の課題です。

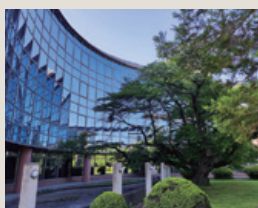
山田：私は男女や世代を意識せずに過ごせるのが一番いい。自分の研究室の中ではなるべく年齢の差とかを気にしないで、私に対して普通に議論をなささいと、学生たちを育てているつもりです。私は大学の外の世界を知らないで研究ばかりしているのですが、同じことを今日、畠山幹事という社会のことをよく知っている方が、大事だと言ってくれたので、私が今考えていることは間違いではないと思えて、ありがたかったです。私も、教授という大学の上位職として、これから新しく見えてくる景色があると思いますので、それで自分の考え方もまた変わっていくのかなと思います。

海妻：日本の女性研究者はやっと2割を超えて、分かって3割到達を目標にしているところですが、先進国では3割には既に到達し4割5割を目指しています。今は過渡期なので、ぎくしゃくもあると思うのですが、あるところまでいったらジェンダーレス、ジェネレーションレスでやっていくことができると思います。その時まで頑張っていきたいと思いますし、そのためにずらん基金を頑張って集めていきたいと思います。今日は長い間ありがとうございました。



海妻 径子 副学長/ダイバーシティ推進室長

座談会収録場所の紹介



岩手大学図書館

約90万冊の蔵書を有し、一般市民も利用。新制大学発足以前の図書雑誌はもとより、浜田家文書などの中世や江戸時代の古文書、農民の入会地裁判に関する資料である小繁文庫など、貴重なコレクションも多い。現在の建物は2000年落成。ガラス窓からなるカーブを描いた外壁の前には大きな桜の木がそびえ立ち、モダンさと自然の共存が感じられる。

畠山 大

岩手県出身。盛岡第一高校卒業後、早稲田大学第一文学部に進学。昭和58年、株式会社テレビ朝日に入社。平成24年より株式会社岩手朝日テレビに転出。平成30年6月、同社代表取締役社長に就任。令和3年5月より岩手経済同友会代表幹事。

山田美和

埼玉県さいたま市出身。2010年北海道大学大学院工学研究科修了。博士(工学)。理化学研究所勤務後、2011年岩手大学農学部に着任し、准教授を経て、2023年5月から教授。専門は応用微生物学。

すずらんニュース

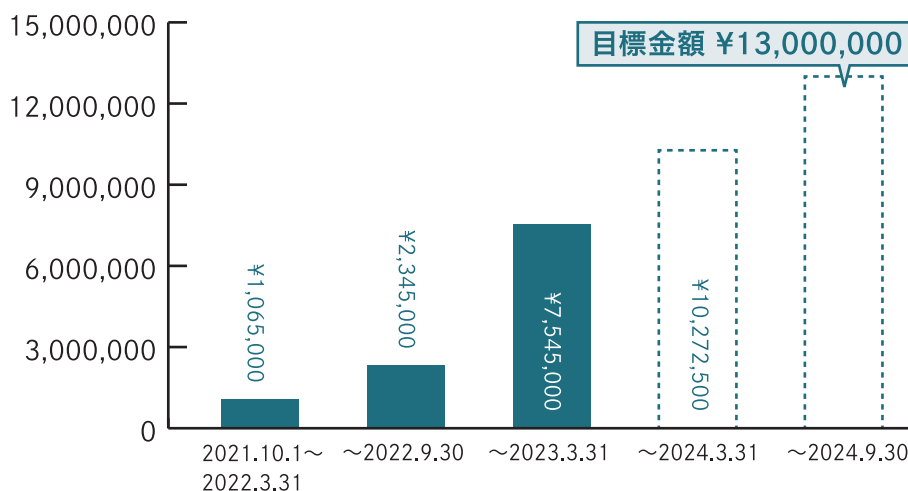
すずらん基金のご紹介

「すずらん基金」とは、岩手大学の学生や教職員が学びやすく、働きやすい環境をつくるため、また地域に開かれた大学として、女性活躍・ダイバーシティを積極的に推進するために設立された基金です。すずらんの花は、本学で初の女性助教授となった鷹嘴テル先生にゆかりがあり、鷹嘴テル先生に続く女性研究者、女子学生を応援したいという思いが込められています。

ありがたいことにすずらん基金は、これまで多くのご寄附をいただいています。今回は、2023年3月末時点での寄附額や、寄附金をどのような事業に活用したか、皆様にお伝えます。

2021年10月1日～2023年3月31日の
寄附状況(累計)

61件の個人の方・法人様から
7,545,000円
のご寄附をいただきました!



すずらんサポーター

(10口以上ご寄附いただいた個人の方)

赤坂百合子 様	菅原 悦子 様
赤澤 典子 様	鈴木 照行 様
阿部 京子 様	浜田 幹子 様
小川 智 様	藤代 博之 様
國井 秀子 様	宮本ともみ 様
下田田美子 様	

すずらん企業

(法人2口以上ご寄附いただいた法人様)

岩館電気株式会社 様
NTT東日本岩手支店 様
川嶋印刷株式会社 様
株式会社北日本銀行 様
東京海上日動火災保険株式会社 様
株式会社ミクニ 様
株式会社吉田測量設計 様

※お名前公表を希望しない方については、掲載しておりません。
※お名前はあいうえお順で掲載しています。また、複数回寄附をいただいた方も含みます。

いただいた寄附金は、このようなことに使わせていただきました。

- 鷹嘴テル賞副賞
- 感謝のつどいの実施



すずらんキャラバン

令和4年度、すずらん基金を知っていただき、女性活躍推進の理念にご賛同いただくため、盛岡市、北上市、釜石市、宮古市などの事業所を訪問させていただきました。訪問させていただいた事業所の皆様、その節はお時間をいただき、誠にありがとうございました。引き続き、当基金へのご理解・ご協力をいただくため、キャラバンを続けてまいります。

すずらん企業 東京海上日動火災保険株式会社盛岡支店 との交流

東京海上日動火災保険株式会社は、2004年からジェンダーギャップ解消の取組を進めておられ、女性営業職数や女性管理職数を大幅に増やしていらっしゃいます。2014年からは自律的なキャリアづくりの支援に取り組み、現在、盛岡支店では鈴木恵子支店長の旗振りのもと、ジェンダーギャップ解消に向けた努力を続けておられます。

令和4年7月には、すずらん基金の理念にご賛同・ご寄附をいただき、「ダイバーシティ推進協力企業(すずらん企業)」になって

いただきました。その後に行った当室との意見交換会では、本学学生と東京海上日動との交流について、できる限り協力をしていくことで合意しました。そのひとつとして、東京海上日動の社員でいらっしゃる宗村氏に本学アメフト部のコーチとしてお越しいただき、学生と交流していただいているところです。今後も、東京海上日動で活躍されている女性社員と本学学生の交流イベントを検討しています。

宗村コーチの一言 (本学学生の印象)

実直で素直、というイメージです。アドバイスに対して、吸収して自分のモノにしてやろう!というスタンスをヒシヒシと感じました。

川嶋印刷株式会社(平泉町)創業111年記念菊地ロクフェローシップ協定締結

2023年3月30日(木)、本学と川嶋印刷株式会社がフェローシップ協定書を締結いたしました。

川嶋印刷株式会社は、創業111年の老舗でいらっしゃいます。創立の節目に、創業者の祖母である菊地ロク氏(1899-1976)を女性経営者の先駆者として記念すべくすずらん基金にご寄附を下され、それを元にフェローシップを立ち上げて「川嶋印刷株式会社創業111年記念菊地ロクフェローシップ」と命名しました。

本奨励金は、新たに本学に赴任した文系の女性教員が、地域に根差し文化振興に貢献して働くことを支援するもので、1人当たり年間10万円が2年間授与されます。授与された女性教員は研究発表にフェローシップ名を明記する等、いただいたお志を広報します。



フェローシップ協定書調印式の様子。左から海妻徑子副学長、川嶋印刷(株)代表取締役社長菊地慶高氏、代表取締役会長菊地慶矩氏、小川智学長

岩手の先駆的女性経営者 菊地ロクさん



在りし日の菊地ロクさん 51.2.8没(享年79才)

菊地ロク(1899~1976)は一関市山目の魚屋の六番目の子として生まれ、牡丹の花の様に落ち着いた気のある、明るい女の子でした。

大正6年、18歳の時、縁あって五十人町で化粧箱屋を経営する菊地岱亮(たいすけ)のもとに嫁ぎました。箱屋の屋号は初代川嶋善次郎の名から「川嶋」と言い、女工さん4、5人の町工場でしたが、若夫婦は賑やかなことが好きで、笑い声の絶えない職場でした。

大正10年に夫の岱亮が病に倒れたことから、ロクは3歳児のたけ、乳飲み子の敏子を抱えながら女工さんと共に働き続け、昭和3年、山目町五代の岩淵久三郎の次男・清を養子として迎え、昭和5年、上大槻町に移転し、川嶋印刷と菊地家の永代の基礎を築き上げました。

ロクの心根の広さと優しさを示すエピソードは言い尽くせないほどあります。蔵の中から衣類を盗もうとした従業員が捕まった時、ロクは「生活に困っていたなら一言相談してほしかった。私の徳の足りないせいです…」と話すなど、実に慈愛に満ちた人でした。

川嶋印刷(株)資料及び関係者より

フェローシップ / fellowship

「仲間であること」の意味のほかに、研究奨励金などの意味もあります。

岩手大学ダイバーシティ推進室の取組紹介

キックオフシンポジウム「I.W.A.T.E.で増やす女性リーダー職研究者」を開催しました



文部科学省の補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型)に、「I.W.A.T.E. 1in3女性リーダー職研究者倍増プラン」が採択されました。その記念として、2023年3月13日(月)にキックオフシンポジウムを開催し、お茶の水女子大学の申 琪榮(しん きよん)教授による特別講演と、八重樫幸治岩手県副知事らを招いての「地方国立大学における女性リーダー職研究者育成の課題」と題したパネルディスカッションを行いました。当日の参加者は60名ほど。参加者の方々からは、「ジェンダーバイアスをどう変えていくか、(中略)難しくとも、変えていく推進力が大事であると考えさせられました」「『大学が地域社会のロールモデルとなる』という考えに賛同します。(中略)地域のモデルとなることを期待しています」等の感想が寄せられました。そのほか、今まで疑問に思っていたことが解消できた、課題意識が明確になった等の声もあり、多くの参加者にとって、これからの大学、ひいては地域全体の女性活躍推進の在り方を考えるきっかけになったことがうかがえました。

特別講演講師・パネリストとしてご出席いただいた
お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構ジェンダー研究所教授 申 琪榮 氏

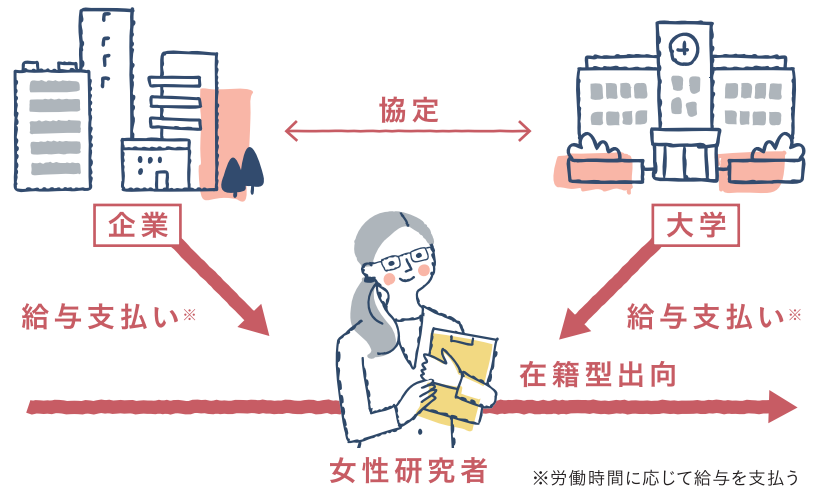
「I.W.A.T.E. 1in3女性リーダー職研究者倍増プラン」で、このような取組みがスタートしています！

若手・女性クロスアポイントメント制度

「クロスアポイントメント制度」とは？

企業等大学以外で働く若手・女性研究者に、企業に籍を置いたまま、大学でも働いてもらう制度

大学院に進まず、企業への就職を選びがちな女性に対し、大学の世界への関心をもう一度持ってもらう機会を増やそうとする取組みです。2022年には複数の企業に打診し、うち1社と具体的な制度の活用に向けて検討を進めています。



女性活躍・ダイバーシティ採用フェア

女性研究者に岩手大学で働く魅力を伝えるため、各地で開催される学会等の機会を捉え、採用フェアを実施しています。採用フェアでは、岩手大学における充実したワーク・ライフ・バランス支援やインクルーシブな職場環境を紹介しています。2022年は、「2022年度量子ビームサイエンスフェスタ(茨城県つくば市)」や「日本化学会第103春季大会2023(千葉県野田市)」で行いました。2023年は3回の実施を予定しており、第1回目は5月に日本栄養・食糧学会大会(札幌市)にて開催しました。学生や研究者等、たくさんの方々ブースを訪れ、岩手大学の女性研究者への支援やダイバーシティの取組みについて知っていただくことができました。



2022年度 量子ビームサイエンスフェスタ



2023年度 日本栄養・食糧学会大会

ダイバーシティ環境実現セミナー

「知っておきたいLGBTQ/性の多様性—もしあなたがカミングアウトされたなら」開催



講師：遠藤まめたさん
遠藤さんは、トランスジェンダー当事者としての自らの体験をきっかけにLGBTの子ども・若者支援に関わっています。

2023年1月30日、一般社団法人にじーず代表の遠藤まめた氏を講師としてお招きし、「知っておきたいLGBTQ/性の多様性—もしあなたがカミングアウトされたなら」を開催。当日は、会場とオンラインに約110名が参加しました。講演では、遠藤さんご自身の体験や支援経験もまじえ、LGBTQの子ども・若者の孤独感や傷つき等についてお話がありました。相談しやすい環境を作るために周囲の人たちが性の多様性に関する知識を身に付けてほしいこと、LGBTQの人たちが安心できる場所を作るために何が大学にできるのかについても指摘がありました。さまざまな属性、状況の人々が安心して学び、働くことができる環境を大学が作り、その取組を地域にも広げていくことは大学の使命のひとつです。すずらん基金は、男女共同参画や女性活躍推進だけでなく、将来的にはLGBTQの人たちを含めた少数派の人たちへの支援にも活用していきます。

「カミングアウト」とは？ 自分の性自認や性的指向を自らの意思で他者に伝えることを言います。

女性のキャリア形成支援リカレントプログラム2023スタート！

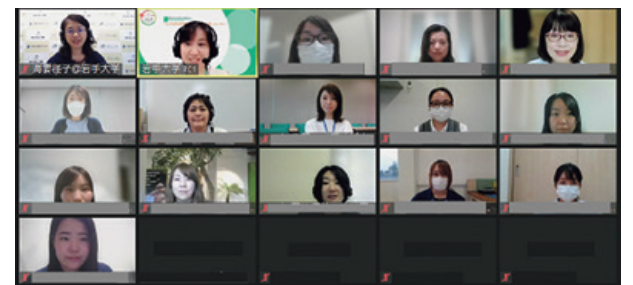


岩手大学では、地域の女性リーダー育成を特長とした「女性のキャリア形成支援リカレントプログラム」を開講しており、今年度は2023年5月19日にスタートしました。このプログラムは2019年から継続開催しており、県内各地の事業所から多くの女性従業員の方が参加しています。カリキュラムの一部を県南や沿岸地域など盛岡市以外の会場で行っており、各地域からもたくさんの方に参加していただいています。参加者からは、業種や職位を越えた交流を通して女性自身がエンパワーされると、毎年好評をいただいています。また、各自治体にも、共催や後援などの協力をいただき、本プログラムは年々県内各地に広がりを見せています。本学のこれまでの女性研究者支援で培ったノウハウを活かして、今後も産学官連携をより深め、地域の女性活躍推進を後押し、地域に還元したいと考えています。

第1回 一般公開セミナー「ダイバーシティセミナー」(オンライン開催)

今回に限り性別不問とした第1回目のセミナーでは、プログラム受講生の他、岩手大学の教職員約13名、計49名が“なぜ女性活躍推進が進まないのか？”をテーマに議論しました。講師の川口章先生(同志社大学政策学部教授)からは、「女性活躍のためには正社員の共働きを可能にする必要があり、そのために男性の働き方を変える必要がある」とのお話がありました。また後半には、ベーシックコース参加者の皆さんによるネットワークカフェを行い、プログラム受講の同期生として、交流を深めていただきました。

ベーシックコースは、この後、第2回を、岩手大学の他、釜石市、北上市の3会場で開催します。また、第2～4回の一部は一般公開セミナーとし、参加者を募集します。ご関心のある方は、ぜひご参加ください。



2023年度ベーシックコース第1回 ネットワークカフェの様子



2023年度ダイバーシティセミナー 川口章先生



花一輪は小さくとも
 〽岩手大学が生んだ女性たち③〽

本学ゆかりの歌人西塔幸子(1900～1936)は、紫波郡不動村(現・矢巾町)生まれ、ほどなく九戸郡に移居。軽米村尋常小学校卒業後に、本学前身のひとつ岩手師範学校女子部に入学します。

幸子は勉強のかたわら、教会で賛美歌を歌い、演奏会を聴きにいくなど、盛岡での学生生活を謳歌しました。卒業後、久慈尋常高等小学校へ赴任した幸子は、地域紙へ短歌の投稿を始めます。大正9(1920)年に同僚と結婚後は、主に下閉伊郡各地の小学校へ数年おきに転任。教壇に立ちつつ、夫の酒癖や嫁としての立場の弱さに悩み、俸給をやりくりして8人の子どもを育てる中で、感じたことを歌にして発表していくのです。

おりしも昭和5～6(1930～31)年の昭和農業恐慌と冷害、昭和8(1933)年の昭和三陸大津波、昭和9～10(1934～35)年の東北大凶作と、災害が続きます。幸子は雑誌『岩手教育』や新聞『岩手日報』に、女給に売られた教え子の話などを寄稿し、東北の窮状を訴えます。また給食や学用品購入費の足しにと、漢方薬となる福寿草の根の採取に、村の子どもたちとともに励んだといわれます。

仕事と家庭と歌作、地域の貧困との闘いで、過労となった幸子は、妊娠中に急性関節リュウマチを発症し、急逝。36年間にも満たぬ生涯でしたが、寒村の子どもへの温かなまなざしと、現代に通じる女性の悩みをうたった幸子の短歌には、1970年代より再び光が当てられ、平成4(1992)年には西塔幸子記念館(宮古市)が開館しました。

すずらんの花のような、本学ゆかりのすばらしい女性たちは、他にもいます。今回は、幼稚園長・女学園長として戦前の岩手の教育を盛り立て、戦後に女性初の岩手県教育委員長となった阿部トシヨ(1890～1963)を紹介します。

海妻 径子(岩手大学副学長/ダイバーシティ推進室長)



メンバーが新しくなりました!ダイバーシティ推進室員紹介

副学長(ダイバーシティ・環境マネジメント担当)
 ダイバーシティ推進室長

海妻 径子

「今号編集を終えて」

対談ご参加の畠山代表幹事は、偉丈夫で包み込むようなお人柄。何かを思い出す…畠山幹事が代表取締役をお務めの、岩手朝日テレビのマスコット「ゴエティ」でした。ゴエティにはオス・メスがあるのか不明、でも子育ては「みんなです」そうです。すずらん基金の活用で、ゴエティ並みのジェンダー平等を実現したく思います。

横澤 則子

好きなこと。笑うこと。食べること。踊ること。旅すること。苦手なこと。怒ること。争うこと。学内の四季を愛でるのが楽しみです。

佐藤 淑恵

すずらんキャラバンの運転もだいふ慣れました。様々な事業所の方のお話はもちろん、道中の車内ミーティング(笑)も楽しんでいます。

佐々木 徹

令和5年4月から事務職員として勤務しております。今までの経験を活かし、様々な事業やイベント等に対応するための事務手続きはお任せください。

小田切 美代子

これまでの感動ベスト3: 上空から見た虹が丸くて感動、飛んでいるハチドリを見て感動、バイソンのハンバーガーが美味しくて感動

菊池 麻由

岩大卒です。キャンパス内を歩くと時の流れが身に沁みる一方、良くも悪くも、あの頃と根本的に変わっていない自分を感じます。

木井 さくや

推進室の大きな窓からは、屏風絵のような桜吹雪や新緑、雪景色が堪能でき、その変化が楽しみです。



佐々木 幸恵

ダイバーシティについてまだまだ勉強不足ではありますが、陰ながらダイバーシティ推進室を支えられるよう頑張ります。

Information

今後のイベント情報

- 感謝のつどい 7月3日(月)
- 鷹嘴テル賞 第二次審査会/7月5日(水) 表彰式/10月10日(火)
- 鷹嘴テル展 10月10日(火)～11月3日(金)

編集後記

すずらん基金の設立から約1年9か月。4ページでもご紹介のとおり、皆様からたくさんのご支援をいただきまして、改めて感謝申し上げます。ダイバーシティ推進室はミニマルな職場ながら、皆がそれぞれ個性を発揮し、力を合わせて、女性のみならず様々な人が働きやすい環境を作るべく、日々頑張っています。笑い声が絶えない明るい職場ですが、実はたくさんの苦労もあり…。紙面を見返すと、今までの努力が形にされたようで、とても嬉しい気持ちです。今号でご紹介したような取組みができたのも、皆様からのご支援・ご協力によるものです。ダイバーシティが特別ではなく、様々な人が当たり前のように学び、働き、生活できる、岩手大学がそんなふうになり、それが地域にも広がっていく…対談をはじめ、今号の記事を編集しながら、期待に胸が膨らみました(菊池)。

【編集・発行】 岩手大学ダイバーシティ推進室

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-8
 Tel: 019-621-6998 / 6038 Fax 019-621-6999
 E-mail equality@iwate-u.ac.jp
 HP: https://diversity.iwate-u.ac.jp



すずらん基金HP



女性活躍・ダイバーシティ推進基金
 すずらん基金



岩手大学
 IWATE UNIVERSITY